天守台
小松同窓会会報

第　8　号
発　行
小松同窓会本部
〒923 小松市丸内町二ノ丸15
石川県立小松高等学校内
編集人　宮崎　榮

私は世界に
二つの宝を持っている
私の友と私の魂と
ロマン・ロラン

坐れば輝く

金沢大学教育学部付属高等学校
教諭　松田　章一

この三月、池袋の中華料理店で上海同窓会と称する会に招かれた。集まったのは十年前の上海復旦大学での受け持ち学年十八名の同期生のうちの四名で、集まれなかった関西などにいるものを含めると九名が在日しているとのことだった。つまり学年の半数が留学したり就職したりで、日本語科の卒業だから当然とは言うものの、たいした数である。中日間の様々の分野での活躍を祈っての楽しい宵であった。ちなみに彼らの語学修得能力は二年くらいで、聞く話す読む書くの大体を終了している。もっとも朝六時には教室の前にきて暗唱しているのだが。

さて、それより一カ月前、長崎県から復旦大学に派遣されていた同僚の北留楼先生（ペルローは雅号だが）と、俳人で演劇映画の翻訳者、只今は岐阜県経済大学教授の、中国人瞿麦先生（俳号）との三人の第四回上海海量同窓会（ハイリャンは鯨飲の意）を伊良湖岬で開き今年も上海づいた春であった。

この瞿麦先生を紹介してくれたのが文学座の北村和夫氏で、復旦大学の宿舎で独り寝転んでいたら瞿麦氏からすぐ来いと自宅へ呼び出され、李白の飲んだ酒はこれだと飲まされたのが最初で、以来会えば中国老酒白酒に明け暮れる三人の上海海量生活が続き、今日に及んでいるわけである。

カッちゃんこと北村和夫氏と知合ったのは「華岡青州の妻」公演以来で、もう二五年になる。その北村氏よりこの二月、文学座の台本を書かないかとの甘い誘いがあり、やがて、すぐ上京せよとの命が来た。行ってみると、北村和夫・平淑恵コンビで、八月の三越劇場公演という次第。演出も鬼才鵜山仁氏と既に決まっていて、書いてみないかというわけである。

二の足三の足を踏みながら、それでも色気根性を出して承知したが、消したり消したりで、七転八倒の半年になってしまった。

ところで、この台本の第一稿は十年前、復旦大学の宿舎で書いていたもので、その時の題名は「友禅の家」。文学座に送ったが、これはもちろん採用にならず、五年前に「白梅は匂へど…」と改稿して金沢で上演した。今回は「花石榴」となり三度目の改題改稿である。

キャッチコピーには〝友禅の川　女がわ　五つの彩の流れ川　友禅姉妹の愛とかなしみ〟と書いたが、金沢浅野川べりの友禅職人の家に、吹き寄せられるように集まってきた人びとの一家離散の物語で、まあ、文学座とはいささかの因縁のある台本といえばいえるか。

そんなこんなで、色々な方々が私をひっぱり出し、楽しみを与えられ味わえることに、深く感謝している。

長い人生だから、いくつもの運命的出会いを持つのだけれども、出会ってみると既に用意されていた「座」であったことに気づかされる。

考えてみれば、小松高校で佐々木守や小倉正一郎に出会っていなかったら脚本の世界に近付かなかっただろうし岩谷浩三がいなければ、上海行きはなかった。

七回卒の仲間達との友情や、小松高校の自由な雰囲気という場所がなかったら、私の今日はなかったろう。

かつまた、あの頃の小松高校のきらびやかな青年教師群が、物凄い迫力を以て生徒たちに迫っていたことに気づく。青春のそういう出会いは、誰にとっても鮮烈なものであるが、質的に高い出会いであったことの幸せはなにものにもかえがたい。

してみると、何年か前にふと浮かんだ「座あり　坐すれば　輝きあり」との文言もまんざら外れていないようである。

「座」を求めてうろつくよりも、すでにわが生涯に対して用意されていた「座」に坐りきれるかどうかが、問われているのであろう。

（高校7回）

「花石榴」文学座公演
（8月20日－9月7日　三越劇場
9月9日－10月18日
中部ブロック市民劇場）

天守台

今号より小松同窓会報は、〝天守台〟の名を頂きました。タイトルは吉田洋三氏（高校18回）にお願いしました。〝天守台〟の更なる飛躍に何卒ご協力のほど。

永遠なれ、天守台の青春

中学四十一回生
卒業五十周年記念大会記
大西　勉

「卒業五十年に元気で天守台の桜の下に集ろう！」それが数年来の私達の合言葉であり目標であった。それも既に追憶の一齣となったいま、歓楽極まり哀情多しの感なしとしない。

平成六年四月九日（土）午前十時、小松市勝光寺に於て恩師並びに会員二十一名の物故者の法要を営む。その席には、加藤清次、大原善衛の両先生、遠く関東、関西から馳せ参じた会員をはじめ同伴の夫人を含む五十一名、中には文字通り五十年振りに合う顔もある。そうして相手に悟られないように名前を確かめている者もいる。しかし法要が終る頃にはすっかり昔の顔に戻って話がはずむ。

勝光寺を出て天守台へ向かう。昔、布製の鞄を背負い脚に巻脚半を巻いて先生や上級生に出会う度に挙手の敬礼をして歩いた道を物珍しそうに記念品入りの袋を下げてぞろぞろ歩く、嘗ての少年達は老い街のたゝずまいも変った。

校門から左へ進むと当時軍事教練の目標になった一本松の辺に先輩が青雲の小径を詠んだ漢詩碑が立ち、桜並木が天守台へと誘う。風は冷たく蕾はまだ固いが私達の胸の中では桜は満開である。全員天守台を背景に記念写真を撮る。天守台に立つ、誰も多くを語ろうとしないのは戦中派の閲歴の重さがそうさせるのであろう。思いは皆同じである。

同窓会館でささやかな昼食会となる。教頭の矢原先生や数人の先生がいろ〳〵お世話して下さるので恐縮する。校門の近くに祝宴会場となる山中温泉の旅館のバスが迎えに来ている。その窓越しに校庭の樹々の間から記念館になっているピンク色の旧校舎が見える。この前で卒業写真を撮ったことをふと思い出す。

午後六時、開宴、五十年の積年の怨みを一挙に晴らそうとするように飲み且つ語る。酒量は些も落ちないのは立派である。宴酣けても騒ぐでもなく、踊るでもなく、しかも誰一人として乱れる者はいない。酌をして廻る接待さんがこんな宴会ははじめてだと感心している。カラオケがはじまる。蛮声？を張りあげて歌うのはやはり軍歌の世代だとすぐわかる。御夫人方の美しいコーラスが出る。旧制中学対旧制高女の共演に青春のほろ苦い思い出が甦る。宴が最高潮に達した頃、大原先生がこの時のためにわざ〳〵持参されたヴァイオリンの伴奏で校歌が輪の中から湧き上がる。会場を圧した歌声が鶴仙渓の闇に消えやがて宴が果てた。

部屋に帰って再び先生を囲んで懐旧談に花が咲く。傘寿の半ばを過ぎても猶矍鑠とした先生方の励ましの言葉を神妙に聞いているのは昔と変らない図だ。隣の部屋では烏鷺の楽しい戦いが続き深更に及ぶ。翌朝、越前観光に出発する。それに参加しない者と各各再会を約して別れた。

猶、記念誌について一言触れたい。この度先輩諸兄の例に倣い「天守台の青春」と題する小冊子を試みた。原稿を寄せカンパに応じる者七十六名中実に七十一名、この熱い友情と団結こそ私達のひそかな誇りである。これまで毎年旧交を温めること三十回に垂んとし、地元のみならず関東、関西の各地区でも幾度となく開いて来た。今後、母校百周年までの五年間の計画を略立てている。また、蛇足であるが同誌のあとがきの一節を以て掉尾としたい。

「昭和十四年四月、学を志す百名の紅顔の少年達は天守台下に集い、学び、遊び、語

り、且つ歌った。それから五年その少年達は眦を決して校門をあとに祖国存亡の戦いの世に出た。新井、宮永の両君が魁けて沖縄の海に散り戦いは終った。そうして戦後の混乱それに続く再建と経済成長の中を、常に世の人の先頭に立って掛け抜けて来た。今、二十一世紀を望む残照に立って、猶、志千里に在り、共に晩節を完うせんことを思う。

ここに卒業五十周年記念大会を開くに当り、幽明を異にせる恩師、並に二十一名の友も九泉より甦り給い、天守台下の桜花の宴に席を同じくされんことを願う。

遮莫、私達にとって天守台の青春は永遠なのである。

（中学41回）

近況

二羽　弥

私達二七回生は九五名卒業したのであるが、創立九〇周年の時には生存者は四五名となった。この写真は創立九〇周年の式典に参列した奥野正二、上出衛、東出良雄と私の四人が天守台で記念写真をと言うことで上出君が撮ってくれたものである。それから五年経た今日、生存者は三〇名程に減少し、その三〇名程も半分位は老衰か病気で伏せって居り、寂しいことになったものだと思う。

私は七月には八三才を迎える高齢ではあるが、幸いに健康に恵まれ、百坪程の畠に野菜や仏花を栽培し、三〇坪程の庭木の手入れや清掃に汗を流したり、所属の趣味の会の人達とその行事に参加して余生を楽しんでいる。

寺井には陶磁器の鑑賞眼を高めるために愛陶会と言うのがあって、その会の世話を二〇年余りして来た。この会は全国の陶磁器の産地や著名な美術館の見学に出掛けたり、窯や作家の作品の研究をしてきた。それで陶磁器展を見れば大体作品の良さを味わうことが出来るので、県内や近県の陶磁器展は欠かさず出掛けて展示作品の鑑賞を楽しんでいる。次に少し理解できるのは書で、書展も欠かさず見ることにしている。また愛園友の会の世話役となって庭園の石造物、庭木の勉強会の外、京都・近県・県内の名園視察、春秋の山草採集なども行っている。その他囲碁・短歌で頭の体操にも心懸け健康保持に努めている今日この頃である。

（中学27回）

五十五年前の追憶

山口　操助

徴兵検査で第二乙を宣告され、先づ戦地へは行かなくともと、ホッとして居たのが、思わず赤紙が届きドキンとしました。時に昭和十二年九月、日支事変の始まったばかりの時、未教育兵として戦地での戦い乍らの訓練。死を前にしての毎日は、口では言えない体と心の全体での体得ぶり。初戦は勝ち軍ではあったが、二年三年と経つに従って敵もさるもの、必ず勝てると思える軍だけ、ゲリラ戦術でやってくることとなり、我々も苦戦に追い込まれて来ました。私が画家であったことから、戦場の有りさまを毎日スケッチしました。そしてその画が掲載された郷土の新聞を慰問として、送り届けてくれました。三年目を迎えた四月十四日標高三千米の山西省での山岳戦でした。朝からすがすがしい山岳でつい馬上から次から次へとスケッチに余念がありませんでした。時々パンパンの銃声にもア、またかと描いていましたがどうも様子がおかしいぞと、身構える姿勢となり気が付けば夥しい敵兵に三方を囲まれているではないか。瞬時にして弾丸は雨霰と飛び来る激戦となってしまいました。こちらも本気で応戦。目も口もあけられない有りさま、フト気がついて、あたりを見廻せば皆倒れてしまい、私一人ではないか。軍馬一〇〇頭は一匹も遺らず倒れてしまった今、これではと横の岩に倚ろうと片膝を立てたその時、敵からのチェコ機銃で右手掌と胸と脊に焼けつくような痛みを感じ鮮血がほとばしるのを感じ、咄嗟に姿勢を低くして、止血にかかること第一と思い、折りしも四月とは言へ高い山岳のこと、昨夜積もった新雪が一米、丁度私をかくしてくれる天与の幸運さ。止血を続け乍ら低い姿勢で左手で雪をかき分け乍ら、六〇米程進みました。敵は執拗に撃って来ている。あと三〇米で谷へ降りる逆落しの道だと、敵はと見ればトーチカから離れて突進して来るではないか。今だと、脱兎の如く雪を蹴立て走る。敵はそれを見て只一人に雨霰と撃ち出した。撃たれてたまるかと、外套の裾をまくり、逆落しに滑

り降りた。大きな岩に制動をかけて、陰に廻り敵はと見れば、頂上からやみくもに、私目がけて撃って来る撃って来る。岩に当った弾は岩のくだけ飛ぶ跳弾となって無気味なうなり方だ。この岩跳弾が体の一部にでも当れば盲貫となり一命を落とさねばならない。而し敵は間もなくあきらめ、谷へ降りて来ない。不思議と命だけは取り止めて、先に降りた原隊へ辿り着くことが出来ました。負け軍でした、完敗でした。私は傷痍軍人となり召集解除で日本に帰り、やがて平和となり、その中国へも七回程絵を描きに行きました。戦場のあとも懐かしくまた戦友の倒れた跡も弔いながら、中国人とも良く話し合いました。戦争のことをお詫びしましたら、とんでもない貴方も私達も戦争の被害者です。只一部の戦争をたくらんだ悪い人がいけなかったとどこへ行っても言われました。中国人は皆良い人と思いました。戦争はおかしいと申しました。そして平和であることを大きく望んでいます。〝戦争は二度とやってはいけない〟

（中学29回）

若林長門

春木　敏男

石川県能美郡誌によれば小松城は、「初築の時代詳らかならず、或は魁賊若林長門の築く所なりとし或は、云々」とあるが、別の記録には、小松城は天正四年（一五七六年）に長門が薮を切り開いて造ったと記されている。当時加賀は「百姓の持ちたる国」と言われていたが、城主等の任免は本願寺の指令であろうから、自分勝手に城主になれなかった。若林長門の名は、これより二年前の天正二年に越前の一向一揆が蜂起して、暫くの間越前を占有した時があった。その時、本願寺十一世顕如の命により、若林長門守は越前の鉢伏山城の河野丸砦の守備に派遣された。鳥越城主の鈴木出羽守も顕如の招きによる一揆の軍事指導者であった。

織田信長は翌天正三年、敦賀より侵入し、鉢伏山城を海陸から一挙に攻略して、僅かの期間で越前の一向一揆を平定して終わった。その際長門は死んだことになっているが、信長も長門と見知りは無いから、当時よくある首のすげ替えでも行われたのか、翌年の天正四年に小松に現れている。長門の出自は不明だが、石川郡林郷の出で、松任城にいたとの説もある。長子の雅楽助は鶴来の舟岡城の城主で、弟を甚鉢郎と言った。後に、信長の加賀侵攻の時、柴田勝家の騙し討ちにあい、天正八年十月七日柏野付近で、若林一族は相い果てて、約百年の加賀一向一揆も終焉を告げた。長門は魁賊と記されている。

（中学34回）

家訓

多川　茂雄

先年三月末に、米国の民俗学者御夫妻が私共の多川家歴史史料館へ調査を兼ねて観光に来訪されました。

多川家史料館（松任市四ツ屋町）

伺いますと、来日以来日本国内の史料館や旧家を回られて、各家の家訓を調べられるのが目的のようでした。

そこで私は、当家の四代目当主茂兵衛によって、今から二百二十年前の明和七年庚寅（かのえとら）十二ノ日に書かれた家訓が残されていましたので、その御話をしました。

その内容は次の様なものです。

永代子々孫々守可き候事。

一、代々親司様女子に金子（きんす）持たすべからず候事。

一、めし時、小作もの、非人・乞食を問わず来たりし者すべて食物ども与えずして帰すことあるまじく候事。

一、毎度仕事ども、往き帰り以てなさる可き候事。

この家訓を御披露した途端、御二人は吃驚されて「ああ漸く、私の国と同じ考えを持った御家に辿り着く事が出来た」と、非常に感激して居られました。

それは、第一条の「代々親司女子に金子（きんす）持たすべからず候事」だったのです。

聞くところに依ると、米国の旦那様は、私家同様奥様には御金を持たせないのが社会通念のようです。

私家もこんな結末で、私不在時には家内は僅か二、八五〇円の新聞代も支払えないのです。

家内は、家訓など知らなかったので、小松中学出身の男は何と吝嗇坊に教育されていると思ったらしいのです。

この立派な家訓の御陰で、多川家は今日迄約七百年の伝統を守り続ける事が出来ているのです。

（中学38回）

学而時習レ之、不ニ亦説一乎

林　滋

新しい勤務先に通い出してから三年経った。往復四時間のバス通勤は、乗り継ぎも入れて全部が始発で、通勤を苦痛に感じた日は一日も無い。

それを逆手にとって「移動図書館」にしてしまった。

買いおきの「若草物語」、「嵐が丘」など英訳版（英教協刊）を読むことにしたが、それで初年度八冊読んだ。帰り香林坊で四十分程の待ち時間があったから、香林坊の四書店が一日交替で巣になり公休日の水曜は武蔵が辻で下車してあそこの書店を二軒まわることになった。それぞれの

書店の特色が理解出来て、この種の本は、あの店のあそこでと僅かの時間で手にすることが出来たので、それぞれを自分の書架のように利用している。それともう一つ、バスの中で受験生のお手伝をすることにした。初年度の子は、金大の法文学部に入学、弁護士志望。一昨年の子は、バスの中は英語に集中していたが、発表を見たら京都大学の農学部に合格。去年の子は、神戸大学の経営学科、すんなりと入学して行った。これが三人とも女の子だから気分的にもほのぼのとしたものが残った。

目標を持って努力する姿は美しいし、若いうちの時間も、残り少なくなった時間も貴重であることに変りはない。

それに気付かせて頂いた英語の広田先生に感謝している。「わしの貴重な時間をお前らの遊び半分な勉強につき合っておられるか。」ハムレットの研究に打ち込んでおいでた短身痩軀の先生が、私の怠け心を叱って下さっている。

（中学46回）

（旧校舎）

随想

福間　文子

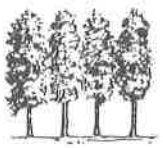
会報第8号を発行する運びとなり何か原稿をとのお便りをいただきましたが、女学校に入学致しました頃の思い出はあまりに遠い日となりました。

私共の頃は入学致しますと袴が魅力的でございましたが、着物は木綿で筒袖という事で隔世の感がございました。背の高いポプラに囲まれた校舎は小さな誇りでもありました。そのため同窓会は白楊会と名づけられました。昭和二十七年白楊会東京支部（後関東支部と改名しました）を発足させ毎年春には同窓会を致しますのが楽しみでございました。東京で集まりましてもこの会は気取らなくてよく、お国言葉もそのままでお話出来る気安さが何よりでした。最初は第一回御卒業の永田みな様に支部長をお願いしました。次は大島孝子様（八回御卒業）に私東京に長く住みましたというだけで支部長を仰せつかってそのまま昨年までつづいて居りました。三十六回の本谷様が会計と庶務、手のかかる事をしていただきましてつとめる事が出来ました。出来るだけ出席数が多いように考えました事もございましたが今は五十名前後の御出席となり会場も東京でも名前の通った所で会合を致して居ります。会員の御協力の賜物と存じて居ります。

私事でございますが満八十才となり、一人暮らしのある日、救急車のお世話になり病院に運ばれました事を期に金沢に初めて出来ました老人ホームに入る決心を致し東京の家を手放しまして去年四月から入居致し、命を預けて元気に過ごして居ります。見学にお越し下さいませ。（県女18回）

ラジオ深夜便と小松

北山　寛子



それは昨年の土曜日の夜のことでした。ふとラジオのスイッチを入れたところ「深夜便」の放送でした。「料理は心で」というおはなしで料理研究家の辰巳芳子さんと担当の宇田川アナウンサーの対談でした。辰巳さんの母上浜子様もかつてNHKの料理番組に出演しておられて、金沢出身との事で、母上から聞かれた金沢の季節の食べ物についてのお話が弾んで、三十分近くお聞きしたのが病付きとなって十一時から始まる「深夜便」の愛聴者となりました。金沢のお話につられて私も女学校時代の想い出など、例えば夏季水泳練習が安宅の浜であって、夏の日盛りを徒歩三十分あまりかかって帰宅すると、冷やした飴湯が作ってあって「ただいま！」と言うやいなや、その飴湯をグーッと飲んだ時の美味しさ、いっぺんに疲れがとれましたなどと投書して、夜中の二時から三時の「皆様からのお便り」のおり取り上げて頂き、「さぞ美味しかったでしょうね」と相槌打って下さいました。十二月末行松旭松堂の辻占（幼時から年末には欠かせない菓子）を皆さんと楽しんで頂こうと宇田川アナウンサーにお送りしました。廿八日の放送で披露され、対談が終わった辰巳先生は「福が舞い込む」と喜んでお帰りになられましたし、アナウンス室の皆もそれぞれ「都々逸」めいた薄い一枚の紙切れに大はしゃぎされ、お酒も入らないのに皆舞い上がったとアナウンスされました。

夜中の三時過ぎての放送でしたが、小松の方で聞かれた人があったらしく、行松さんから早速電話が来まして「今、店へお客さんが見えて小松の辻占というお菓子で一同盛り上がったというラジオでしたよ」と喜んでお礼申されました。いつもは自分の投書を読まれたのも知らずに寝入ってしまう私ですが、その夜は賀状を書いている主人共ども放

送を聞いておりましたので電話の話にさすが全国ネットワークのNHKの威力と感心したのでした。これからも小松の風物詩について駄文を寄せたいと思っております。

（県女27回）

花との出逢い

清水　千恵

四季のめぐりの速さに戸惑いを感じている内にもう四月も半ば、花壇の準備が始まる季節になってきました。

御縁があって主人と「末広ふれあい花壇」のお世話を始めてから今年で十三年になります。「小松中央ライオンズクラブ」から「市」へ。「市」から「小松市社会事業協会」へ委託され、「小松花と緑を育てる会」のモデル花壇として作られています。毎年桜の花の咲く頃から花壇の植込みの準備が始まります。雑草取り、肥料やり、土おこしと種々の仕事があります。整地のあと、苗の間隔を計り、花と花との配色を考えて「はし」を立て、位置を決めます。

六月の植込みの日は保育園児・小中学校児童・老人会・民生委員の方々の御協力で朝二時間程で見事に植付けられます。「サルビア・マリーゴールド・ベゴニア・アゲラタム・ペチュニア・カンナ・日々草」等、二千五百株程の苗が植えられます。翌日からは灌水・除草・花がら摘みと日に日に奇麗に大きく成長して行く姿を見るのが楽しみです。夏の暑い日、汗をかきながらの朝夕のひととき、雨や台風の時もお花を案じながら、無事な姿を見ると「ホッ」と致します。

夏休みには末広の子供会がラジオ体操のあと、花がら摘みを手伝ってくれるのでとても助かります。純真な子供達との「ふれあい」は私達にとっても貴重な一時です。

（末広ふれあい花壇）

秋、「サルビア」が真っ赤に咲き、「ベゴニア」「マリーゴールド」など色とりどりの花が咲き競います。昨年の県の「花壇コンクール」に、「大和ぬくもり花壇」と共に優秀賞を受け、感激しました。今後も、「人とのふれあい」を大切に「子供達に花を」の願いを忘れず、「今年も奇麗な花を咲かそう」と四月から活動を開始しました。

小松中学出身の「雪博士」中谷宇吉郎先生は蒼空から舞い降りてくる雪を見て、「雪は天から送られてくる手紙である」と云われましたが、朝陽を受けて可憐に咲いている花を眺めていると、誰かが「花は大地が送ってくれた恋文である」と云った言葉が身にしみて思い出されるのです。

（県女28回）

文学碑巡り

剱崎　富枝

小松高校にある五基の文学碑が「小松の文学碑」という小冊子に紹介されています。いつかじっくり見たいと思っていました。

四月半ば、五人程のグループで芦城公園の花見をしました。

「ここまで来たのだから」ということで念願の文学碑を見ることになりました。

（前庭）

きれいに手入れされた高校の前庭に四基の碑がありました。北村喜八氏歌碑、中谷宇吉郎博士詞句碑、関戸弥太郎博士歌碑、勝木保次博士詞句碑。同窓の大先輩の碑は後輩達の卒業記念として建立されそれぞれに記念樹が添えてありました。世界的にも有名な方々のエピソード等を語り合いながら碑を巡りました。

長い伝統のある学校なので沢山の記念樹があります。松、梅、樅、椎、楓、椿、栂、百日紅、泰山木、沙羅双樹、等々。様々な行事と相俟って小松高校の歳時記が作れそうだと思いました。

もう一基の碑は校舎から天守台へ続く、「青雲の小径」の入口にあり、名付親である本陣良平金大名誉教授作の七言絶句の漢詩碑でした。

創立九十周年の記念事業の一つとして整備された桜並木は開花の時期が異るように設計されているとかでまだ蕾のものもありました。

図書館の前に多羅葉の木がありました。葉書の語源でもあるこの葉を拾って帰り、「平成六年四月十一日、小松高校の文学碑巡りを記念して。花は三分」と爪楊枝で書きました。

（県女31回）

菓子博に思う

寺尾　章子

新緑映える五月半ば第二十二回全国菓子大博覧会が大盛況のうちに閉幕となり、期間中は予想以上に県内外からの人々で賑わいました。

菓子業界挙げての取組みと関係者の皆様のすばらしい熱意が大成功に結びついたに違いありません。

開幕前日は菓子業組合からの依頼で、全国から寄せられた審査品の数々（七千点余り）の種類分け作業に当り、またその夜は全日空ホテルにて前夜祭の打上げパーティーに出席し、全国各地から来られた役員

の方々となごやかに食談の一時を過ごすことが出来た喜び、そして初対面とは思えない程皆が一致団結して会の成功を誓い合ったあの時の感動は二度と味わうことが出来ません。

私も主人に先立たれて一年半、再び巡って来ない当地での開催に、何とかして主人に変わって出品しなければと決意し、改めてその誇りと期待、責任を通感致しました。

開幕一ヶ月前、出品作を決め、『勧進帳、安宅の関』と題し曲水に義経の智、富樫の仁、弁慶の勇、を紋どころに型どり、日持の良い半生菓子で製作致しました。

出品にあたり大博覧会場と言う公の場に自分自身の作品を表現する機会に恵まれたこと、そして思い切って出品出来たことが、今私にとって最高の喜びでもあります。それが励みとなって毎日楽しく元気で頑張っております。

これを機に地域社会に少しでもご協力出来ればと思っている今日この頃です。

（県女37回）

今日此頃

田畑　澄子

昔は四十の手習いとして、お謡を習いだし、今は六十の人生勉強と、ようやく介護福祉士の国家資格を戴きました。そして今は、松寿園のお手伝いに自転車で出かける明け暮れで御座います。思いかえれば、昭和十六年の戦争が始まった時は小学四年生でしたので以来十分な学力も持たず、その空白が何時も心のどこかにあり、そのせいか絶えず新たな挑戦の機会を求めている私です。

雨の音に静かに、すぎし日を思う時、いろいろのことがありました。肉親が、師が、そして友等との別れ、今更乍ら一期一会と人様に接しさせて戴く時の大切さを味わっております。松寿園でのデイサービスに見えられる人達を毎日〳〵お迎えし、また毎日〳〵お別れしているわけですが、今日もまたそのお元気なお顔を見られる時が一番嬉しい此頃です。

精一杯の真心を一人ひとりに差し上げようとの思いが返ってお年寄りの人達からいたわられて申し訳ない日々を過ごさせて戴いて居ります。

今は自分の出来る限り折角戴いた介護福祉士の資格ですから体が動く間役立てゝ参りたいと思って居ります。

（市女21回）

俳句

砂糖壺

岡田　桃子

母の日のリボンをつける
砂糖壺

梅実り納屋の後がにぎわえり

ピロピロと若葉がしゃべる
風の中

（高校18回）

還暦〝ゼロからの出発〟

松岡　孝

一部屋だけ黒い紙を巻いた電球、米機の空襲に身も心もすくめた防空壕、そして敗戦。考えもしなかった事実に脳天をグワーンと殴られたようなショック。

八月十五日は毎年巡って来るが、昭和二十年八月十五日は何と強烈にそれぞれの人生に係って来たか。

終戦時六年生だったので戦後の最初であり、小松中学校の名のもとで入学した最後のクラスに私達は居た。

波乱、動乱の中で私自身は、とっくに自分を見失っていたが、ほとんどの同期の桜は皆立派に花を咲かせている。

和泉洸君も親しい友の一人だが画家である彼はすべてに優しくて、酒や話や人生のことで一度も仲違いしたことがない。その優しさに免じて失礼を承知で彼を紹介させて戴く。

小学校時代からその画才は丈けていて図画の時間にはいつも羨ましい思いをした。美大卒から数年は超前衛手法と云うか感情そのものをカンバスにぶつけて、絵の具の固まりを削いだり積み上げたりして遊んでいた。その時期、彼にとって最も自由であり楽しくもあり自らに忠実に生きていたと思う。

しばらくして私の見た彼の絵は、冷たく悲しく戦中や戦後の生きかたの中で運命付けられたものが色濃く表されていた。むせかえるような夏草も、刻一刻と色合いを変えていく山肌も、そこに歩む人物さえも、すべての万象を絶対温度で一瞬のうちに氷結してしまって、時間まで止めてしまう大きなエネルギーを感じた。それは息を止めて防空壕にひそんだ怖さに等しかった。

時間が止まればそこは無限の世界であり新しくゼロからの出発を意味する。少年期の衝撃を感性として表現できる彼におおいにエールを送りたい。この度スペインへの修業があったと聞くが還暦を迎えて、ゼロからの出発である作品と出合うことを楽しみにしている。

（高校4回）

青春ドラマの校舎

石橋　拓樹
（旧姓名　鹿野祐司）

大学進学とともに上京して以来、生まれ育った郷里を離れての生活の方が長くなりました。仕事柄人と接する機会が多い私ですが東京には全国から人が集まっているのでビジネスの合間に出身地や学生時代のことが話題になることが多くあります。在学中には特に気に止めていなかった小松高校の立地環境が大変素晴らしいものであることが改めて認識させられます。

当時、運動部を題材とした青春学園ドラマがテレビで流行し、私も毎週夢中でそれを見ていたものでした。校舎が旧小松城の敷地内にあり、正門前には旧庭園の芦城公園が広がり、その中を歩き通学した毎日。グランドは陸上トラックの他に野球、サッカー、ハンドボール、テニスのコートが各々ある広大さで周辺には昔の城郭跡の石垣がありました。学校の近くを梯川が流れ、その堤防のどて道は日本海へ連がりそこを各部とも体力作りの為に海までマラソンをする光景が今も思い出されます。それらの光景はまさに当時の青春学園ドラマに登場してくるような場面そのものであり、そうした環境に於いて学ぶことができた私は大変恵まれていたことと思えてなりません。

今日、首都圏に生活する小学生、中学生、高校生をみていますと、一方で受験進学の対策に追われ、他方で学校を囲む自然環境や施設の状態は小松高校のものとは比較にならず、卒業二十年にして今さら乍らに我が母校の素晴らしさとそこで学ぶことが出来た幸せを感じております。

（高校27回）

職場から

杉谷　晃

14年振りに戻った故郷での職場は、北陸大学である。我が母校からも毎年数名が入学して来てくれる。

周知のとおり、18才人口は減少の一途を辿っており、大学、ことに私立大学においては「より良き大学」を目指して独自色を出すために、日々、改革を行っている。

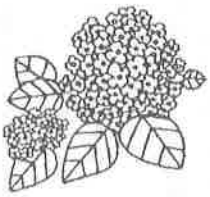
私は、赴任の年、総務課に配属され、大学運営の大変さを思い知らされた。とかく、監督官庁へ提出せねばならない文書が膨大なのである。そうして提出された文書に基づいて実際の運営が行われて行くのであるが、個性・独自色を打ち出して行くには、長い時間と綿密な計画、計算が必要とされ、一種パズルを解くような面白さを発見したりもする。大変な部署ではあったが、知的な雰囲気のあるところであった。

一転して、今年、就職指導課に配転となった。世はリストラの渦中にあり、片一方で人員削減を進めているのであるから、来春卒業予定者にとっては、狭き門であることは自明の理である。ところが実際に学生と話してみると、認識の甘さが非常に目立つ。

四年という歳月において、彼等には、学業の他に、考えるべきこと悩むべきことが、数多くあったはずなのに、改めて、「なぜ、その会社を選ぶのか。」を問うと、言葉に詰まるのである。私達の仕事はこうした学生に対し、大学生活で感動したこと、得たもの等を今一度呼びさましてあげることである。このような過程を経ると、ようやく社会に対し目を向け始める。今彼等は、おそらく初めて人格・人間性を問われる試練に向けて四年間の総決算に取り組んでいる。

私事で恐縮ですが、彼等の社会への出発を手助けいただければと切に思い、紙面を借りてお願いしたいと思います。

（高校31回）



（2年生実力テスト風景）

本部よりのお願い

小松高校新聞の次の号をお持ちの方はしばらくお貸し下さい。コピーを取らせていただき速やかにお返しいたします。

○第六十五号（昭和三十六年春発行）
○第七十二号（昭和三十七年五月～十一月発行）
○第七十三号（同右）
○第百十三号（昭和四十五年八月～十一月発行）
○第百十四号（同右）

以上何れも発行日は不明です。

心当たりがおありの方は、同窓会本部までご連絡をお待ちいたします。

卒業して半世紀

本会に所属する同窓生のうち、卒業50周年記念誌を刊行されたものは、次のとおり。

記念誌のあらまし

◎中学第33回生50周年記念誌
「**青春の譜**」（B5判52頁）
（昭和61年8月刊行）
昭和11年3月、卒業生75名
（世話人代表、宮崎　榮）

◎中学第36回生50周年記念誌
「**天守台のうた**」（B5判90頁）
（平成元年3月刊行）
昭和14年3月、卒業生81名
（世話人代表、源　智義）

◎中学第37回生50周年記念誌
「**卒業五十周年**」（B4判写真4頁）
（平成2年10月刊行）
昭和15年3月、卒業生83名
（世話人代表、後藤長平）

◎中学第41回生50周年記念誌
「**天守台の青春**」（B5判102頁）
（平成6年4月刊行）
昭和19年2月卒業生100名
（世話人代表、大西　勉）

◎中学第43回生40周年記念誌
「**天守台の追憶**」（B5判133頁）
（昭和60年8月刊行）
昭和20年3月卒業生131名
（世話人代表、藤田栄進）

記念誌のトップを切った43回もアト一年で半世紀の筈。50周年誌刊行が期待される。

◉高校卒も5年先には50周年の筈。掲載の冊子は図書館に寄贈済。時代は違っても青春は同じ筈、お役に立てば（M）

お知らせ

本年三月、新書判の「小松の文学碑」が小松地方文芸コレクション推進協議会によって発刊されました。同書の中には、小松市内を中心とする各所に散在する五十五基の文学碑が紹介されています。

小松高校校地内からも、北村喜八歌碑（高校42回生卒業記念）、中谷宇吉郎詞句碑（高校43回生卒業記念）、関戸弥太郎歌碑（高校44回生卒業記念）、勝木保次詞句碑（高校45回生卒業記念）、本陣良平『青雲の小径（こみち）』漢詩碑（小松高校創立九十周年記念）が取り上げられています。

テレビ小松では同書に準拠して、「小松の文学碑」という番組を製作することになり、六月十一日、小松高校でその収録が行われました。

当日は青天に恵まれ、約三時間をかけて、同書発行の中心的役割を果たされた宮崎榮氏（中学33回）へのインタビューや、小松高校内にある前記五つの石碑の項の執筆を担当された井口哲郎氏（高校3回・前小松高校長）による各石碑の解題、解説が収録されました。

小松高校で収録された分は七月九日、七月十二日よりそれぞれ三日間、前・後編に分けて放映されます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

このほど、〝いしかわ人国記〟の取材のため、石川テレビの取材班が来校しました。

〝いしかわ人国記〟ではすでに、中谷宇吉郎（中学15回）、北村喜八（中学15回）、の両氏が取り上げられていますが、今回は、新木栄吉氏（中学6回・明治四十二年卒。明治二十四年、小松市東町生まれ。二度にわたる日銀総裁、東京電力会長、サンフランシスコ講和条約締結後初代の駐米大使等を歴任。昭和三十四年死去）の取材が行われました。

新木氏の幼少、小松中学時代を中心として、本校前庭、島田先生、大島先生、中村先生の胸像、記念館、本校所蔵の扁額、白峰、小松高校新聞等が撮影、取材されました。

なお、同番組の放映は十一月ごろの予定（日時未定）です。

新木氏の扁額（小松高校所蔵）

10年間の合格状況

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
北海道大	2	4	6	5	8	3	4	6	3	6
東北大	3	5	12	6	8	4	9	11	10	10
筑波大	1	4	7	1	7	8	6	0	2	4
千葉大	3	2	5	4	5	6	7	7	9	3
東京大	1	2	2	3	3	2	2	4	3	7
東京外大	2	3	0	2	0	0	1	0	2	1
東京工大	0	0	2	2	3	2	0	2	2	0
お茶水大	1	2	1	2	2	0	1	2	1	0
一橋大	2	3	3	2	1	0	1	1	2	2
横浜国大	2	5	4	6	9	7	6	5	3	3
新潟大	2	3	11	3	7	9	6	6	3	5
富山大	26	27	59	39	66	76	43	34	30	33
富山医薬大	0	1	13	7	7	2	2	1	5	2
金沢大	79	92	95	74	93	80	60	70	62	71
福井大	8	15	10	13	15	6	10	8	7	3
福井医科大	2	2	1	1	0	0	1	1	0	0
信州大	3	3	6	10	15	14	8	9	9	12
静岡大	2	3	9	10	14	8	12	13	7	6
名古屋大	4	2	5	2	7	4	4	7	7	6
名古屋工大	0	1	5	1	4	1	1	3	4	4
滋賀大	2	3	7	0	2	0	4	6	0	3
京都大	7	4	5	3	4	7	14	7	6	7
大阪大	2	1	8	4	7	5	7	8	11	7
大阪外大	1	0	2	5	4	4	3	2	3	2
神戸大	2	2	6	3	4	9	4	9	6	13
広島大	0	2	3	1	4	3	1	2	0	7
その他	32	17	27	44	52	23	48	56	35	29
国立大合計	189	208	314	253	351	283	265	280	232	246

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
東京都立大	2	1	0	2	3	2	3	2	2	0
横浜市大	0	2	3	0	1	1	1	1	1	4
金沢美工大	1	5	3	4	1	2	4	4	2	0
京都府大	1	3	3	0	1	3	2	0	2	1
大阪市大	0	1	2	2	2	2	2	2	3	1
大阪府大	0	2	2	1	7	4	3	2	5	2
神戸市外大	0	1	5	1	2	1	1	1	2	1
その他	14	13	14	16	14	12	13	17	18	16
公立大合計	18	28	32	26	31	27	29	29	35	25
早稲田大	13	11	20	15	20	17	15	16	21	12
慶応大	11	7	18	6	12	7	10	2	12	14
明治大	15	17	22	20	18	20	14	15	12	17
立教大	3	3	9	7	10	8	5	2	2	6
法政大	6	7	13	13	15	22	19	15	19	9
中央大	17	9	17	11	13	13	10	14	10	10
日本大	8	20	19	12	9	20	25	20	22	25
青山学院大	5	7	8	4	7	14	6	9	9	4
東京理科大	22	13	18	11	25	15	16	7	18	11
上智大	5	3	8	6	2	5	3	0	4	3
同志社大	20	17	18	16	18	27	25	23	28	35
立命館大	26	21	55	30	31	39	31	27	40	60
関西学院大	12	5	7	6	7	7	6	15	15	20
関西大	15	18	16	12	8	19	31	21	41	23
京都産業大	6	4	20	16	10	14	17	9	15	14
京都女大	12	17	11	7	7	7	7	10	8	4
同志社女大	4	3	3	5	4	4	3	8	3	4
その他	163	127	181	139	204	186	239	345	285	306
私立大合計	363	309	463	336	420	444	482	558	564	577

進路より

長引く不況や18才人口の減少は国公立大志向、実学志向、医療福祉志向など進学環境に様々な変化をもたらしている。また大学においても学生の気質の変化だけでなく、大学設置基準の改正等により教養部廃止、新学科設立、学科の再編成や教育課程、大学院の充実など大学大衆化の中で知的交流の場をめざしての改革が進められている。こうした状況の中で高校生にとっては今まで以上に進学の意味が問われることになる。

本校の昨年度の合格状況は表の通りである。1クラス減にもかかわらず合格者は伸びており健闘が目立つ。東京大7人合格は昭和36年以来である。またここ数年の10大学（旧帝大と東工大・一橋大・神戸大）の合格者数は10年前の2倍となっている。高齢化社会に向けて医療関係、福祉関係に進む生徒も年々増えている。高校生にとって進路決定、進路実現は難しいことであるが積極的に視野を広める努力をし、自分が本当に行きたいところへ行けるよう頑張って欲しいものである。

追悼　勝木保次博士

去る三月六日、神奈川県の自宅にて勝木保次氏（中学20回）が永眠されました。（88歳）

感覚生理学の世界的権威として知られ、昭和四十八年には文化勲章を受賞。また郷里小松の中学生のため「勝木賞」を設けるなど、幅広い足跡を残されました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

本部だより

◇平成六年小松同窓会新年会は一月二十一日(金曜日)小松グランドホテルで開催されました。中谷公治氏（高校20回）の司会で、出席者二百三名が懇親を深めました。最後に中学、県女、市女、高校と校歌を斉唱し、和やかなうちに会を閉じました。

◇小松同窓会本部では、かねてより、テレフォンカード二種類（デザインは〝天守台〟と〝青雲の小径〟）を作成し、ご希望の方に頒布していましたが、残り少なくなりましたので、この度、非常に人気が高く需要が多い〝天守台〟のカードを増刷致しました。

五十度数で頒布価格は八百円です。ご希望の方は、小松同窓会本部までどうぞ。

◇本年度は同窓会事務局のメンバーが次の四名になりました。ご要望・アドバイス等遠慮なくお寄せください。宜しくお願いいたします。

西田正彰・西　清人
清水俊明・藤田紀子

第9号の原稿募集

◎〆切　本年11月30日
◎内容　自由（在学中の思い出、近況、体験、趣味、旅行記、文芸等）
◎長さ　六〇〇字程度
◎送先　同窓会本部会報係宛
◎発行　平成7年1月同窓会新年会